

音楽活動を伴ったパネルシアターの展開

—児童文化財また保育教材としての意義と有用性について—

平 澤 節 子
Hirasawa Setsuko

キーワード パネルシアター、児童文化財、保育教材、表現、音楽活動

1、はじめに

パネルシアターとの出会いは平成21年、勤務する短期大学の児童文化研究所が主催する第32回児童文化研究大会で、パネルシアターの創案者古宇田亮順氏によるパネルシアターの講演会が開催されたことにある。「夢をひろげるパネルシアター」と題された講演と古宇田氏によるパネルシアターの実演は、筆者が担当するゼミナールの指針となり、以後8年間学生を率いて市内の子育てイベントや高齢者福祉施設を訪問しながら、コンサート活動のメインプログラムとして実演を続けている。パネルシアターの題材を選定し、製作、歌や演じ方の練習、そして地域へ赴き実演する一連の活動をとおして、パネルシアターには児童文化財としての役割だけではなく、その製作の過程や実演に向けた取り組みが学生らの保育技術を向上させていることが経験的に確認されてきた。そこで本稿ではパネルシアターの児童文化財としての側面と幼稚園や保育所などで保育教材として実演されることの利点、そして保育者養成校の学生にとってパネルシアターを学ぶことの意義についてパネルシアターの表現分野を分析しながら幼稚園教育要領・保育所保育指針との関連性を取り上げ、パネルシアターの有用性について探っていきたい。

2、パネルシアターについて

(1) パネルシアターの起こり

パネルシアターは古宇田亮順（1937～ ）によって創案されたもので、パネル板と呼ばれる舞台上で絵を動かしながら物語や遊びを展開していく保育現場では馴染みの活動である。その発祥はキリスト教の布教で行われていたフランネルグラフにあり、絵が描かれた紙の裏にフランネル（flannel：毛織物で、ネルとも呼ばれる素材）を貼り、同じフランネルが貼られたパネルに絵を貼ったり外したりしながら聖書を語る布教活動に用いられていたという。古宇田は1937年東京都上野の寺の三男として生まれ、大正大学仏教学部に入学し、在学中は児童研究部で全国各地を巡回しながら人形劇などの活動に力を入れていた。それと並行して寺で仏教童謡を歌ったり人形劇や紙芝居などを演じたり、地域の子どもへの活動も行っていたという。とり

わけ人形劇において、既存のものでは取り扱いに課題を抱えていたなか、同じ児童研究部で活動していた兄からフランネルグラフの技法を聞き、それがパネルシアター創案への第一歩となったようである。その後古宇田は教育委員会の職員を経て住職となり、これまでの経験をもとに貼り絵による仏教話、昔話や童謡などを各地で展開していったという。その後、パネルシアターの基盤となるPペーパー（パネルシアター用不織布）を見つけ出し、1973年にパネルシアター作品を初めて発表し、全国をはじめ世界各地でパネルシアターの普及に尽力しながら今日にいたるのであるⁱ。フランネルグラフはキリスト教の布教に活用され、欧米をはじめ日本でも日曜学校などで絵解きとして用いられているが、寺の三男として生まれた古宇田がこれに出会い、仏教の絵解きとしてこの手法を活用し、現在のパネルシアターの創案に繋がる場所に運命的な導きすら感じられるのである。

(2) パネルシアターの仕組み

フランネルグラフはその素材であるフランネル（ネル）に由来し、フランネルが貼られたボード上でフィギアとも呼ばれる絵の切り抜きを動かしながら物語を展開するキリスト教式の表現方法である。一方パネルシアターは、パネル（panel：板）上で絵人形を用いて物語や歌が繰り広げられるシアター（Theater：劇場）のようだということから創案者の古宇田によって「パネルシアター」と名付けられたⁱⁱ。パネルシアターについて古宇田は、「布地のパネル板に絵（または文字等）を貼ったり外したりしてお話、歌遊び、ゲーム等を展開して行う表現方法ⁱⁱⁱ」と定義しており、これまで行ってきた人形劇やフランネル素材を用いた活動と比べ、パネルシアターは①パネル板に絵がそのまま貼りつく、②絵が表裏両面に描ける、③製作が容易などの利点を挙げている。これを可能にしたのがパネルシアターに適した不織布の発見に他ならない。パネルシアターはパネルも絵人形も共に不織布でつくられ、パネルに貼られる布はパネル布、絵人形で用いられる不織布はパネルシアターの頭文字からPペーパーと呼ばれ、古宇田によるとパネル布には日本不織布3150番、PペーパーにはMBSテック（三菱製紙）の130番、180番が適しているという^{iv}。静電気や繊維どうしが微細に絡まる仕組みから、パネル布には毛足が長めで毛羽立ちの良いものが選ばれ、Pペーパーには裏表両面に絵が描けるよう表面が滑らかで、絵の具がにじまず、絵人形を貼ったり外したりしても布地が丈夫で、加工しやすいものが適していることから、上記①、②、③の利点を生んだといえることができる。また白地のパネル布を黒地のパネル布に置き換え、蛍光絵の具にブラックライトを当てて行うブラックパネルシアターという表現方法もあり、子どもが好む幽霊やおばけの世界、また夜や宇宙空間などの描写などに優れ、白地のパネルシアターとは異なる表現が可能である。これらは大東出版社やアイ企画、東洋文化出版や保育教材を取り扱う多数の出版社によって取り扱われており、パネルシアターの材料や作品集など容易に手に入れることができる。パネルシアターが創案されておよそ45年となるが、これも保育・幼児教育現場（本稿では以後、保育現場と称する）に広く普及し、保育教材としてのニーズが高い証である。

(3) パネルシアターの表現

パネルシアターは保育現場をはじめ小学校や地域社会での講演・講習会の場で演じられる機会が多い。視覚的であるのは勿論であるが、演じ方によってパネル上で絵人形を自在に操ることができ、同じ視覚的な絵本や紙芝居といった平面的な教材に比べ表現の幅が無限である。そこで、古宇田が著書の中で推奨するパネルシアター作品（51作品^v）を取り上げながら、パネルシアターで表現される活動をストーリー性があるもの、ゲーム性があるもの、童謡などの子どもの歌の3つに分類し、それぞれの特徴について探っていききたい。

a) ストーリー性があるもの：12作品（全体の24%）

『赤ずきんちゃん』、『大きな根』、『かさじぞう』、『きれいな窓』、『三びきのやぎとトロルのおはなし』、『シャボン玉とばせ』、『せんとく変身しやわららん』、『七夕』、『のはらに咲いた』、『パンダさんこんにちは』、『まるい卵』、『まんまるさん』

b) ゲーム性があるもの：13作品（全体の25%）

『あれは何者だ』、『あわぶくかくれんぼ』、『いないいないばあ』、『おちたおちた』、『すてきなお手紙』、『そっくりさん』、『誰のあしあと？』、『だれの手』、『どうぶつカード』、『なんだろう三角』、『なんでもボックス12か月』、『ポンポンポケット』、『やおやのおみせ』

c) 童謡などの子どもの歌：26作品（全体の51%）

『アイアイ』、『雨ふりくまの子』、『あわてんぼうのサンタクロース』、『宇宙へとびだせ一週間』、『おばけなんてないさ』、『おはようクレヨン』、『おはようさん』、『おもちゃのチャチャチャ』、『カレーライス』、『げんこつ山のたぬきさん』、『サンドイッチ』、『しょうじょう寺のたぬきばやし』、『すうじの歌』、『そうだったらいいのにな』、『だ・あ・れ？』、『たこ焼きパクッ！』、『小さな庭』、『どんぐりころころ』、『とんでったバナナ』、『畑のポルカ』、『はみがきのうた』、『パンダうさぎコアラ』、『へんしんポテト』、『みんなの広場』、『山の音楽家』、『山のワルツ』

このように、古宇田が保育や実習に適すると推奨する作品は、a) のストーリー性がある作品は全体の24%（小数点一桁は繰り上げ）、b) のゲーム性があるものは全体の25%、c) の童謡などの子どもの歌は全体の51%と一目して音楽が伴うパネルシアター作品が多い。a) の表現の特性としては、物語の展開や登場人物が現れるタイミングに合わせてパネル上に絵人形を貼ったり外したりできるため、物語が朗読されるスピードとタイミングに合わせた場面進行が可能である。絵本や紙芝居は、絵本の1ページまたは紙芝居の1枚において、これから朗読される内容が絵として既に提示され、次の展開が読めてしまうため、朗読と場面展開に時間差が生じる。これに比べ朗読と場面展開が同時に行えるパネルシアターは見るものの想像力や好奇心をより刺激し、予測のできない場面展開が期待できるため、演じるものの朗読力や演技力にも

左右されるが、集中度の高い状態で物語を楽しむことができる。また b) においては、ゲームやクイズのやり取りの中でPペーパーの裏表両面に絵を描けるという特性から、絵人形や絵文字などの素材を裏返しにしてシルエットのみでヒントを与えたり、数枚重ねてもパネル布に密着する特性から、かばんやポケットの中から答えの一部分だけを見せながら答えに導いたりすることもできる。またクイズの答えとなりうる候補をいくつかの絵素材で示しておき、そのなかから見ている子どもにひとつ選ばせ自身でパネル布に貼るという展開もできる。答えを探し出す楽しみに加え、Pペーパーがのりも磁石もない状態でパネル布に密着するという不思議な体験は、幼児期の子どもの好奇心を増幅させる活動になるものと考えられるのである。また c) の歌が伴うパネルシアターの活動については、特に幼児期の子どもにおいては言葉の発達や脳の記憶（メモリ）という面では成人と比べて発達途上の段階であるため、メロディに合わせて歌詞を紡いでいくという歌唱行為には言葉の補助が欠かせない。その意味で直接的または間接的に歌詞を補う手段としてパネルシアターを用いることは非常に有効的である。さらに歌に歌われる物語や情景をパネルシアター上で視覚的に表現することが可能なため、想像力を働かせながら歌詞の内容に思いを寄せて、より豊かな表現をもって活動を行うことができる。また、上記のパネルシアター作品には、a) や b) の物語やゲームの進行過程において、一定のリズムやメロディを伴うかけ声を要するもの（『大きな木根』）や、わらべうた調の節回し（イ音、ト音、ホ音など構成音が2〜3音）のもの（『おちたおちた』）など、a) + c) または、b) + c) のように、それぞれの中に音楽的な要素を含むものや、a) + b) のようにクイズと物語双方の性格を合わせ持つもの（『すてきなお手紙』）など、物語とゲーム、ゲームと音楽、物語と音楽など複数の要素を持つ活動がみられた。そもそも童謡や子どもの歌はメロディに伴って物語や情景が語られるものであるから a) + c) ということがいえるのだが、パネルシアターを用いたこれらの活動は同時に複数の保育活動を行うことができ、子どもの発達年齢に応じてその要素を保育者らが組み合わせて、オーダーメイドの指導をすることが可能である。こうしてパネルシアターの創作者である古宇田の推奨する作品を分析していくと、保育現場に欠かせない物語の読み聞かせやクイズなどゲーム性のある活動がパネルシアターでの表現に適し、とりわけ音楽を伴ったパネルシアター作品が多いことから、童謡や歌などの音楽活動にパネルシアターという保育教材と表現方法とが欠かせないということが改めて確認されたのである。

3、児童文化財かつ保育教材としてパネルシアターを考える

(1) 児童文化財としての役割について

絵本や紙芝居など保育現場で取り扱われる子どもの生活や遊びに関連するものをまとめて「児童文化財」と称することが多い。「児童文化」とは、子どもの成長にかかわる文化そのものとされ、「児童文化財」は子どもの健全な心身の発達に深いかかわりを持つ有形無形のもの、技術、活動^{vi}、とされている。「児童文化」について川北ら（2015）は、①本や児童文学、紙芝居や玩具など、おとなが子どものために創造した文化財、②子ども自身の創造活動およびそこから生まれる所産、③遊びを中心とした子どもの活動とそれを支えるおとなの活動、④児童館や

児童図書館などの文化施設^{vii}と定義しながら、現在では「児童文化」という概念が多様化し、所説混在していると指摘している。一方「児童文化財」について小川ら（2010）はその著書のなかで、「おはなし」、「絵本」、「紙芝居」、「パネルシアター」、「ペープサート」、「エプロンシアター」、「人形遊び」、「劇遊び」、「玩具・遊具」、「伝承遊び」の10種を児童文化財としている。川北ら（2015）は「絵本」、「児童文学」、「紙芝居」、「人形劇」、「アニメーション」、「おはなし」、「劇的活動」、「子どもの行事」、「遊び」、「児童文化施設」の10種を挙げ、そのなかでパネルシアターは紙芝居に属するものとして、ペープサートとまきとり絵に並んで紹介している。また久富ら（2002）は、「お話」「絵本」、「紙芝居」、「手遊び」、「ペープサート」、「パネルシアター」、「エプロンシアター」、「ゲーム」、「折り紙」の9種を挙げている^{viii}。このように「児童文化財」は、いわゆる子どもの成長と生活にかかわるものから施設にいたるまで多岐に渡りまた解釈も異なるため、本稿では保育現場でいわれるところの「児童文化財」、つまり保育教材として取り扱われている内容を総称して「児童文化財」としたい。また音楽を専門とする立場からいえば、童謡や子どもの歌、そして保育現場で用いられるリズム楽器なども児童文化財であることをつけ加えておきたい。

「絵本」、「紙芝居」そして「パネルシアター」などの児童文化財は子どもの生活と成長に密接なかかわりがあることから、家庭や保育現場で広く用いられている。これらの実践や活動においては親や保育者らなどの演じ手側と、子どもや対象者などそれらを観賞する側に分けられ、つまりひと（人）対ひと（人）との対人関係のなかで表現環境が成立している。一方、乳幼児期の子どものを取り巻く生活や遊びについて考えてみると、現代の子育て世代の家族構成や働き方の変化と家電製品の目まぐるしい進歩により、家庭の隅々にまで電化機器が広く普及している。またスマートフォンやタブレット端末の普及により、メディアなどの電子媒体に支配された生活を送っているといっても過言ではない。子育てにおいては親など養育者の心身のストレス軽減と生活の質を担保するために様々な機材やメディアが生活に浸透している。例えば電動ゆりかごといわれるようなベビーベッドやベビーチェア、またそれに童謡などの音楽が流れるメロディ機能付きのものや、アプリケーションの類、例えば夜泣きや泣きなまない子どもをあやすためのアプリ、寝かしつけアプリ、ソフトウェアを立ち上げると登場するキャラクターらとのやり取りをするコミュニケーションアプリ、そして知育・保育アプリといわれるものまできりがなくない。もちろんこれらをすべて否定するわけではなく使い方次第であると考えるが、子どもの成長や以後の人格形成の根幹となる時期に行われる子育てや保育は、元来、人の手によってなされてきたのであるが、近頃では子育てや保育の領域にまで機械やメディアが深く浸透している印象を受ける。ちなみに“機械化”という言葉調べると、広辞苑では「生産・労働手段に機械を導入すること^{ix}」とあるが、別のものでは「人間の行動が主体性を失って機械のようになること^x」や、「外的な刺激に支配されることにより、人間の活動が個性・自主性を失うこと^{xi}」と、機械に頼りすぎる現代の我々に警鐘を鳴らすかのようなものである。「児童文化財」とは、まさに人から人へ受け継がれ、地域性やその時代性に応じて姿かたちを柔軟に変えながら伝承されてきたものである。人を介すことで社会性やコミュニケーション力、集中力や

忍耐力、主体性と共感性など、まさに“人間力”を培ってきたということができるのである。近頃の子どもや保護者または保育従事者にまつわる不幸なニュースを目にすると、大人も子どもも、この“人間力”が健全に養われずにきたことが起因しているのではないかと考えられるのである。かつて当たり前のように行われてきた子育て環境やその手段を取り戻すことこそが、これらの問題を改善する手立てになるのではないか。そのためには、人の手を介して行われる「児童文化財」の重要性を再認識し、保育現場のみならず子育てにかかわる家庭や社会にその考え方を啓発していく必要がある。そのために保育者や保育者を目指して養成校で学ぶ学生らには、自らに児童文化の伝承者としての役割があることを忘れず、保育教材として保育内容に積極的に取り入れていくことが求められているのである。

(2) 保育現場におけるパネルシアターの有用性について

保育内容に関しては幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領に定められているところであるが、そこで求められる内容とパネルシアターの活動を通して得られる資質・能力・心情とを照合しながらパネルシアターの有用性を探ることとする。パネルシアターは複合的な要素からなる活動であるため、まずその内容を分析することから始めたい。パネルシアターの有用性について、古宇田はその著書のなかでパネルシアターの魅力を「見る」・「演じる」・「つくる」の3つの立場から述べている。保育現場では保育者が演じ、子どもらが「見る」側となるが、パネルシアターを観賞することで得られるものについて著者の言葉をそのまま引用しながらみてきたい。それによると、「①布地のパネルという素材のやわらかさ、やさしさの上で展開される安心感。②保育者の明るい表情に接しながら味わう喜び。③絵が貼りつき、その絵が自由に動く楽しさ。④絵や演技に助けられ、声をそろえてうたえる喜び。⑤一瞬の変化や意外性のある展開を通して、驚きや不思議な世界を味わう喜び。⑥未知の世界、楽しい話、勇気ややさしさの話に触れ、心や気持ちが豊かになる。⑦絵の展開に触発されて、みんなと一緒に手遊びを楽しむ。⑧クイズやゲームを通して応答できる喜び。⑨ときには絵を貼らせてもらったり、見た作品を劇遊び等にして楽しむことができる^{xii}。」とある。シアター上で展開される物語やクイズに親しむという単一的な内容だけではなく、a) 布という素材そのものへの興味・関心、b) 布が貼りつくという科学的な面白さ、c) 朗読や演技などのパフォーマンスに親しむ、d) 多様な物語をとおして実生活では得られない様々な心情を疑似体験する、e) 思いを共有する、f) 歌や手遊びを楽しむ、g) 言葉のやり取りや応答を楽しむなど、パネルシアターには様々な要素が複合的に包括されていることが理解できる。そして何より演じる側と見る側相互の信頼関係を深めるツールであり、保育現場において有用性の高い保育教材であるということが確認された。

(3) 幼稚園教育要領と保育所保育指針との関連性

前項ではパネルシアターを観賞する側から捉え、これらの活動を通して得られる資質・能力・心情について検討した。本項では幼稚園教育要領^{xiii}と保育所保育指針^{xiv}の各領域の内容と、パ

ネルシアターの内容との関連性を確認するため、古宇田の示したパネルシアターの特長①～⑨とそれらを分析した a)～ g) の内容に関連・該当するものを以下に挙げていきたい。

・幼稚園教育要領と保育所保育指針（3歳児以上の保育に関する内容）

健康 内容(4) 様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。

人間関係 内容(1) 先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。

(5) 友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合う。

(10) 友達との関わりを深め、思いやりをもつ。

環境 内容(2) 生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。

(6) 日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。

言葉 内容(1) 先生や友達の言葉や話に興味や関心をもち、親しみをもって聞いたり、話したりする。

(4) 人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。

(7) 生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。

(9) 絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像する楽しさを味わう。

表現 内容(2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。

(6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。

(8) 自分のイメージや動きや言葉を表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

・保育所保育指針（1歳以上3歳未満の保育に関する内容）

人間関係 内容(1) 保育士等や周囲の子ども等との安定した関係の中で、共に過ごす心地よさを感じる。

環境 内容(2) 玩具、絵本、遊具などに興味をもち、それらを使った遊びを楽しむ。

言葉 内容(1) 保育士等の応答的な関わりや話しかけにより、自ら言葉を使おうとする。

(4) 絵本や紙芝居を楽しみ、簡単な言葉を繰り返したり、模倣をしたりして遊ぶ。

(7) 保育士等や友達の言葉や話に興味や関心をもって、聞いたり、話したりする。

表現 内容(2) 音楽、リズムやそれに合わせた体の動きを楽しむ。

(4) 歌を歌ったり、簡単な手遊びや全身を使う遊びを楽しんだりする。

- (5) 保育士等からの話や、生活や遊びの中での出来事を通して、イメージを豊かにする。

このように、幼稚園教育要領及び保育所保育指針における各領域の内容と、パネルシアターを觀賞する側から得られる資質・能力・心情とを照合すると、教育・保育の領域のほぼすべてにおいてパネルシアターの内容が関連していることがわかる。パネルシアターは児童文化財であり、かつ保育教材ということが出来るが、活動から得られる内容がほぼ5領域のすべてに該当するほど多様な内容を包括しているということが、保育現場をはじめ保育者を目指す学生らにどれほど認知されているであろうか。また、幼稚園教育要領や保育所保育指針で目指される「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と照合すると、①健康な心と体、②自立心、③協同性、④道徳性、規範意識の芽生え、⑤社会生活との関わり、⑥思考力の芽生え、⑦自然との関わり・生命尊重、⑧数量や図形、標識や文字への関心・感覚、⑨言葉による伝え合い、⑩豊かな感性と表現、のすべてにおいて深く関連しており、これらが就学後の教科教育の素地となっているということが出来るため、パネルシアターを利用した保育活動の有用性が確かなものとなった。

(4) 保育技能習得のためのパネルシアター

幼児期の子どもにとってパネルシアターは鑑賞物のひとつであるが、取り扱う保育者や保育者をを目指す学生にとってどのような意義があるか、製作や実演を通して得られる力について考えていきたい。パネルシアター作品においては既成のものが数多くあるが、これを製作段階から実施すると仮定して分析をすると、物語やゲームの展開に応じて構成を考える「場面割り(カット割り)」、Pペーパーに登場人物などを描き、色や仕掛けを施す「絵人形の製作」、物語やゲームの展開を推し進めるための歌や朗読などの「音楽表現とパフォーマンス」と、大きく3つの要素から成ることが分かる。パネルシアターはパネル板上で物語やゲームが展開されるため、製作においてはまず場面割り(カット割り)を考えることから始まる。その過程では物語を要約したり、または対象児に分りやすく伝えるために物語を再構築するなど国語力や幼児の言葉の発達に対する理解が欠かせない。物語の選択においては幼児の生活を豊かにし興味や関心を広げていくために、命の大切さや思いやりなど道徳的な内容を含むものや身の回りの自然や社会に関心を寄せるもの、日本の生活や伝統文化を題材とするものなど、製作者側には意図してそれらを選択できる審美眼が求められてくる。また絵人形の製作においては、絵を描いたり彩色したりする美術、造形表現の能力、絵人形に仕掛けを施す際に用いる針と糸を使った家庭科の技術も欠かせない。また完成した絵人形などを用いて演じる際には、物語を展開する手段としての朗読や演技力、歌や楽器などの音楽表現の技術、鑑賞する幼児らとの臨機応変なかけ合いや、その場の状況に応じてアドリブなどで演じる適応力も求められてくる。したがってパネルシアターの製作や実演をとおして、教科や領域の内容を学生自らが学びながら、自身の保育技術を向上させることができる保育教材であるということが出来るのである。

4、音楽活動を伴うパネルシアターの実践

(1) ゼミナールの活動

筆者が担当する幼児教育学科のゼミナールでは、8年前よりゼミナールの活動として市内の子育てイベントや高齢者福祉施設に赴き、パネルシアターを中心としたコンサート活動を実施している。その内容は訪問先によって異なりはするが、季節の歌をはじめ童謡などにリズム楽器やトーンチャイムを加えた合奏、歌に振付を加えた身体表現、対象者とのコミュニケーションを目的とした手合せ、そして昔話を題材としたパネルシアターの実演などを行っている。パネルシアターに選ぶ題材は、『桃太郎』や『浦島太郎』など古くから伝承されている昔話に歌が付与する“昔ばなし歌”が伴うものとしている。この昔ばなし歌は、高齢者福祉施設の明治、大正、昭和世代の利用者にはなじみ深く、今の年齢になってもメロディが聴こえてくるとおのずと口ずさんでおられる様子がみられる。祖父母から子、そして孫へと、まさに歌い継がれてきた日本の伝統文化、児童文化財ということがいえるのである。しかしながら養成校で学ぶ学生らにはなじみがないようで、この昔ばなし歌は授業やゼミナールの活動で初めて耳にするという学生も少なくない。そのためこれらのコンサート活動では昔ばなし歌を用いたパネルシアターを実演することで、学生をはじめ乳幼児期の子どもとその保護者に日本の伝統文化に触れる機会としているのである。将来の保育者を養成するということは日本の伝統文化の継承者を育成するといっても過言ではなく、その意味で学生らに教材として昔ばなし歌を扱うことの意義は大きい。また当ゼミナールでは、昔話を取り扱う際には市販のパネルシアター作品やCDは用いず、物語の筋に沿って場面割り、絵人形の製作、歌や音楽の演奏などすべて学生らが行っている。これまで題材として取り上げてきた作品は、『桃太郎』（文部省唱歌/岡野貞一作曲）、『一寸法師』（巖谷小波作詞/田村虎蔵作曲）、『浦島太郎』（文部省唱歌）、『うさぎとかめ』（石原和三郎作詞/納所弁次郎作曲）、『金太郎』（石原和三郎/田村虎蔵作曲）、『花咲じじい』（石原和三郎作詞/田村虎蔵作曲）である。以下この2年間のゼミナールの学生が製作したパネルシアター作品を紹介する。

・平成28年度の作品『桃太郎』（文部省唱歌/岡野貞一作曲）



1、桃太郎さん 桃太郎さん	2、やりましょう やりましょう
お腰につけた きびだんご	これから鬼の せいばつに
ひとつ私に くださいな	ついて来るなら やりましょう



3、行きましょう 行きましょう	4、そりや進め そりや進め
あなたについて どこまでも	一度にせめて せめやぶり
家来になって 行きましょう	つぶしてしまえ 鬼ヶ島



5、おもしろい おもしろい	6、ばん万歳 ばん万歳
残らず鬼を せめふせて	おともの犬や 猿キジは
ぶんどりものを えんやらや	いさんで車を えんやらや

- ・平成27年度の作品『花咲じい』(石原和三郎作詞/田村虎蔵作曲)



1、うらの畑で ポチが鳴く	2、意地悪いさん ポチ借りて
正直じいさん 掘ったれば	うらの畑を 掘ったれば
大判小判が ザクザクザクザク	瓦や貝殻 ガラガラガラガラ



3、正直じいさん 白彫って	4、意地悪いさん 白借りて
それでもちを ついたれば	それでもちを ついたれば
またぞろ小判が ザクザクザクザク	またぞろ貝殻 ガラガラガラガラ



5、正直じいさん 灰まけば	6、意地悪いさん 灰まけば
花は咲いた 枯れ枝に	殿様の目に それが入り
褒美はたくさん お蔵にいっぱい	とうとう牢屋に つながれました

(2) ハンディ・パネルボードの開発

パネルシアターの装置は一般的なもので80cm×110cmのパネル板と73cm×50cmのスタンドから成る。これを保育室内のテーブル上に設置して演じるため、幼児の身の回りにある児童文化財の中ではかなり大掛かりな装置である。絵本や紙芝居の大きさに比べダイナミックな表現ができるところに魅力があるが、一方でその規模の大きさから保育現場では絵本や紙芝居に比べ取り上げられる頻度が低いものと推測できる。吉田・藤田（2007）^{xv} は、都内A短期大学の保育者養成課程に在籍する学生を対象とした実習保育所における児童文化の現状について、日常の保育に取り入れられている児童文化を調査した結果、絵本94%、紙芝居79%、テレビ55%、パネルシアター53%としている。絵本が94%というのには頷けるが、パネルシアターの日常保育での実施が55%と予想以上に多い結果であった。これはパネルシアターの創案者である古宇田にゆかりのある短期大学での調査であることと、近隣にある実習保育所にはその卒業生らが保育者として数多く着任しており、必然的にパネルシアターの実施率が半数を超える高い結果となったものと考えられる。逆に言えば、ゆかりのない他の地域ではパネルシアターの実施率はこれよりも低いのではないか。

そこで、パネルシアターの大掛かりな装置を簡略化し、養成校の学生が積極的に活用し、保育現場でも手軽に行える手持ちサイズのパネルボード“ハンディ・パネルボード”の開発にあたった。古宇田の著書のなかにもパネル板を小さくして首から下げられるように工夫したミニパネル板が紹介されているが、それをさらに利用しやすく改良したものである。以下にその作り方を示す。

【ハンディ・パネルボード】の作り方

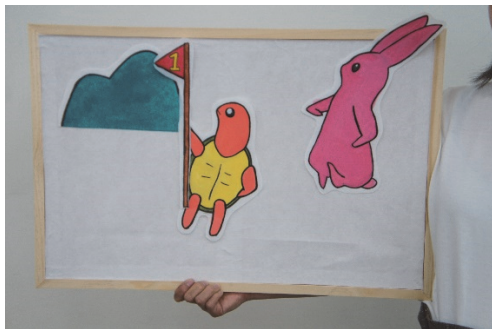
・材料

コルクボード（40cm×60cm）、パネル布、両面テープ

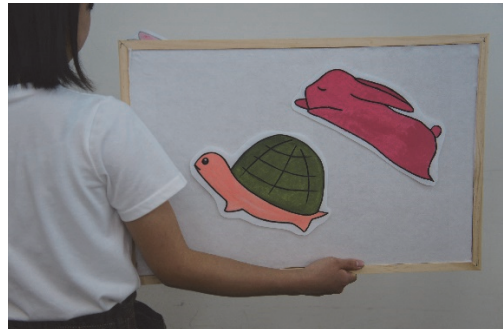
・作り方

- ①コルクボードの内側に両面テープでパネル布を貼る。
- ②裏面にも同様にパネル布を両面テープで貼って完成。

【ハンディ・パネルボード】



（表面）



（裏面）

このように、ハンディ・パネルボードは裏面にもパネル布が貼られているため、これから提示する絵人形を予め貼っておくことができる。また大きさは通常の紙芝居ほどあるため、実習生には欠かせない自己紹介や部分実習時、また登場人物の少ない物語程度なら実演可能な大きさである。本体はコルクボードで出来ているため非常に軽く、片手での操作が容易である。これから保育者を目指す学生らにはまずこの程度の小規模なパネルシアターから製作、実演をはじめ、次第に通常の大きさのものに移行しながらパネルシアターに親しんでもらいたいと考えている。

5、おわりに

パネルシアターの児童文化財、また保育教材としての有用性を探るべく、本稿ではパネルシアターが表現しうる内容をはじめとし、鑑賞する側に与える効果や保育・教育の五つの領域との関連性、また保育者養成校で学ぶ学生らの教材としての利点について考えてきた。パネルシアターはその表現の特性から音楽を伴った活動との親和性が高い。メロディやリズムが見る者の心情に働きかける作用が強いからであろう。またパネルシアターで行いし得る内容は“表現”をはじめとする、保育・教育の五領域また教科全般に及んでおり、子どもだけでなく保育を学ぶ学生らにとっても有用な教材であるということが再確認できた。保育技術というと音楽・リズム、造形、言語などが挙げられるが、パネルシアターの活動はこれらの保育技術を高めるだけではなく自らの表現力をも向上させる。また子どもらの前での実演はアドリブなど即興的なやりとりが欠かせず、これを経て臨機応変な適応力を養うことができるのである。昨今の学生はマニュアルやシナリオがあればそれに沿って活動を行うことができるが、その場の状況に応じた対応を自ら考え行動に移すということが苦手といわれることが多い。その意味でパネルシアターの実演は、目の前の子どもの様子を観察して、いま必要な働きかけや手立てを考えるといった対応力やコミュニケーション力を養うものと期待できるのである。また、筆者のゼミナールで実施している訪問活動はパネルシアターの題材を自ら選定し製作、地域に赴き実演するという一連の活動から成るアクティブラーニングであり、主体的な学びである。またそこで扱われる巖谷小波（1870-1933）、田村虎蔵（1870-1943）といった明治の児童文学や音楽に触れることは、保育を学ぶものにとってはまさに温故知新である。パネルシアターは日本と発祥とする児童文化財であり保育教材でもある。この優れた文化遺産を、ゼミナールをはじめ養成校で学ぶ学生らに継承すべく今後も活動を続けていきたい。

注

- i 藤田佳子「パネルシアターの歴史（1）～創始者古宇田亮順とパネルシアター～」『淑徳短期大学研究紀要』第52号、2012、pp. 182 - pp. 191
- ii 藤田佳子、前掲書、p. 191

- iii 古宇田亮順、松家まきこ、藤田佳子『実習に役立つパネルシアターハンドブック』萌文書林、2009、p. 8
- iv 古宇田亮順、松家まきこ、藤田佳子、前掲書、p. 9
- v 古宇田亮順、松家まきこ、藤田佳子、前掲書 pp. 114 - pp. 119
- vi 小川清実、森下みさ子、内藤知美、河野優子、小林由利子『演習 児童文化 保育内容としての実践と展開』萌文書林、2010、p. 39
- vii 川北典子、村川京子、松崎行代『子どもの生活と児童文化』株式会社創元社、2015、p. 4
- viii 久富陽子、天野恵子、中島由紀子、但木英美、来間聖子『実習に行くまえに知っておきたい 保育実技 児童文化財の魅力とその活用・展開』萌文書林、2002
- ix 新村出編『広辞苑』第六版 株式会社岩波書店、2008
- x 金田一晴彦、池田弥三郎編『学研国語辞典』第二版 株式会社学習研究社 1989
- xi 松村明監修『大辞泉』株式会社小学館 1995
- xii 古宇田亮順、松家まきこ、藤田佳子、前掲書、pp. 10 - pp. 11
- xiii 幼稚園教育要領 2017
- xiv 保育所保育指針 2017
- xv 吉田弘子、藤田佳子「幼児教育における児童文化～実習保育所における児童文化の現状について～」『淑徳短期大学研究紀要』第46号、2007、pp. 133 - pp. 134